

5章 シニア世代におけるインターネットとの関わりが、 心理的ならびに社会的 well-being に及ぼす影響の検討

浦 光 博

1. 問題

(1) オンライン・オフラインでのサポート授受の影響

ソーシャル・サポートに関する膨大な研究は、対人環境から豊かなサポートを受けることが、それを受けた者の種々の well-being を高めることを示してきた(たとえば、Cohen & Wills, 1985; 浦, 1992; 松井・浦, 1998)。一方で、サポートを受けることのネガティブな影響を確認した研究も見受けられる(たとえば、Allen, Blaskovich, Tomako, & Kelsey, 1991; 菅沼・浦, 1997)。これらは、サポートを受けることで自尊心が脅かされる可能性を示唆するものである。

またシニアを対象としたソーシャル・サポート研究においては、サポートを受けることよりもそれを提供することの方が well-being にポジティブな影響を及ぼすことが示されている(たとえば、Kim, Hisata, Kai, Lee, 2000)。サポートの提供が効力感を高める効果を持つ可能性が示唆される。

これらの研究のほとんどは対面的な相互作用におけるサポート（オフライン・サポート）の影響を扱ったものである。しかし、近年インターネットの急速な普及に伴って、インターネット上でやり取りされるサポート（オンライン・サポート）の影響を検証しようとする研究も増加している（たとえば Larose, Eastin, Gregg, 2001）。インターネットと対人関係との関連をめぐる研究の扱う基本的な問題は、かつてはインターネットの利用が、対面的な相互作用からの引きこもりを生じさせるのではないかとの疑問から発していた(Kraut, Lundmark, Patterson, Kiesler, Mukophadhyay, & Scherlis, 1998)。つまり、インターネットへの過剰な関与が対面的な相互作用からの引きこもりを生じさせ、結果として well-being を損なう可能性が指摘されていた。しかしながら、このようないわゆるインターネット・パラドックスの現象は必ずしも頑健なものではなく、むしろインターネット利用が長期的には社会関係や well-being をより望ましいものにすることも示されている(Kraut, Kiesler, Boneva, Cummings, Helgeson, & Crawford, 2002)。

この点に関して、浦・宮田・長谷川（2000）は子育て中の母親を対象とした調査において、オンライン上あるいはオフライン上のサポート授受が彼女らの自尊心ならびに抑うつ程度に影響することを明らかにした。具体的には、インターネット上の子育てフォーラムにおいてより多くのサポートを受領するほど自尊心が高まり、それが長期的には抑うつを低下させる効果を持つこと、オンラインで多くのサポートを得るほど、その後オフラインでのサポート提供に積極的になることが示された。

これらの知見に基づくならば、シニア世代においてもオンライン上ならびにオフライン上のサポート授受が利用者の心理的 well-being を高める機能を持つだろうとの予測が成り立つ。さらにはサポートの受領よりもむしろサポートの提供の影響が強いだろうとも予測できる。以上の議論に基づき、ここではまずオンライン、オフラインのサポートと心理的 well-being との関連についてこれらの予測の妥当性を検証する。

(2) パソコン、インターネットの利用が社会的 well-being に及ぼす影響

一方、社会的 well-being についてはどうだろうか。ここでは、社会的 well-being を社会関係資本の蓄積に寄与する個人変数として捉える。このような社会的 well-being に及ぼすオンライン・サポートの影響を考える際、大きく異なった2つの立場がある。すなわち、一方にはインターネット上で築かれたネットワークは社会関係資本の蓄積に寄与しないという主張がある(たとえば、Putnum, 2000)。他方、インターネットの持つ橋渡し機能に注目して、それが結合型の社会関係資本の欠点を補うことによって、結果として全体的な社会関係資本を高めることにつながるとの主張もある(たとえば、Lin 2000)。

本研究は後者の立場に立つ。上述のとおり、オンラインで得たサポート情報がオフラインネットワークへと汎化(spillover)することが示されている(浦・宮田・長谷川 2000)。これはインターネットが橋渡し機能を有することを強く示唆する結果である。

ただし、この結果はサポート情報の汎化現象を示すだけであり、オンライン、オフラインでのサポートが個人の信頼の醸成や互惠性規範の内在化に影響するかどうかはいまだ明らかにはなっていない。そこで本研究では、シニア世代のオンラインならびにオフラインでのサポートが信頼と互惠性規範にいかなる影響を及ぼすのかについても検討する。

以上の検討に加えて、本研究ではさらに PC 利用が社会参加を促す可能性も検討する。社会関係資本についての研究に基づけば、信頼の醸成や互惠性規範の内在化はボランティア活動や市民活動といった社会参加を促すという。とすれば、今回調査対象となった受講者たちにおいても、PC 利用の促進が信頼の醸成や互惠性規範の内在化を促す結果として彼ら彼女らの社会活動への参加頻度を高めることが予測できる。

2. 方法

上述の検討のため、ここでは心理的 well-being の指標として自尊心と全体的な健康度の得点を、社会的 well-being の指標として信頼と互惠性規範の内在化の得点をそれぞれ用いた。そしてこれらに影響するサポート変数として、オフライン、オンラインそれぞれにおける情緒的サポートの受領と提供、パソコンやインターネットに関連するサポートの受領と提供ならびに気軽なおしゃべりの主観的な頻度を用いた。それぞれの well-being 諸変数の第2回調査時点での得点を基準変数とし、オンライン・オフラインサポートについての第1回調査時点での得点を説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。なおその際、well-being 諸変数の第1回調査時の得点を統制変数として同時に投入した。また、PC やインターネットのスキルが well-being 諸変数に及ぼす影響を統制するため、それぞれのスキル得点も同時に投入した。さらに、調査対象者のパソコンやインターネットへのかかわりの質を統制するため、調査対象者を4群に分類し、それぞれにダミー変数を割り当てて投入した。4群とは、IT 講習の受講者で2回の調査時ともに PC を利用していないと答えた群(未利用者群：n=155)、IT 講習の受講者で第1回調査時には利用していないと答えたが第2回調査時には利用していると答えた群(新規利用者群：n=94)、IT 講習受講者で2回の調査時点ともに利用していると答えた群(継続的利用者群：n=70)、ならびにシニアネットの会員で2回の調査時点ともに利用していると答えた群の4群である(シニアネット会員：n=77)。なお、これらのいずれにも該当しない群(n=23)は分析対象者から除外した。結果として、最終的に重回帰分析の対象となったのは396名である。

次いで、社会活動への参加に関連する予測の検討のため、調査対象者の4群それぞれにおいて、2章で述べた団体活動の参加頻度が第1回調査時点から第2回調査時点にかけて増加したかどうかを分析した。その際、団体活動について「町内会・自治会」、「婦人会」、「老人クラブ」への参加頻度得点を平均し、これを「町内会等参加頻度得点」とした。同様に、「社会福祉・ボランティア活動」と「市民運動や住民運動」の平均値を「市民運動等参加頻度得点」、「趣味、習い事、教養のサークル」と「健康、スポーツ」のサークルの平均値を「趣味グループ等参加頻度得点」とした。これら3種類の参加頻度得点のそれぞれについて、調査対象者群（調査対象者間4条件）×調査時点（調査対象内2条件）の2要因混合デザインの分散分析を行った。

以下にここまでで触れられていない変数について説明する。

重回帰分析における基準変数

自尊心：Rosenberg(1965)の自尊心尺度(10項目、5件法)を用いた。

全般的な健康度：「全般的に言って、あなたの今の健康状態はいかがですか」という問いに対して「全く健康である」(1点)から「全く健康ではない」(5点)までの5段階で回答を求めた。分析に際しては、高得点ほど健康度が高くなるよう値を変換したものを全般的な健康度得点とした。

信頼：「ほとんどの人は信頼できる」「たいていの人は、人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する」、「全く知らない相手と重要な用件について交渉することになった場合、知り合いが自分をその相手に紹介してくれることは非常に重要である」、「知らない人よりも、知っている人のほうがずっと信頼できる」「一般に、長く付き合っている人は、必要なときに助けてくれることが多い」の5項目に対して「そう思う」(1点)から「そう思わない」(4点)までの4段階で回答を求めた。分析に際しては、高得点ほど高信頼を示すよう数値を変換した。

互惠性規範の内在化：「人から何か手助けをしてもらったときに、お返しができないようなことがあったとしたら、あなたはどのように感じますか」という問いに対して、「すぐにでも別の理由を見つけてお返しをしたいと思う」(1点)、「いつかお返しができるようになったときお返しをすればよいと思う」(2点)、「お互いさまなので、あまり気にしない」(3点)、「全く気にしない」(4点)の4段階で回答を求めた。分析に際しては、高得点ほど内在化の高さを示すよう数値を変換したものを互惠性規範内在化得点とした。

重回帰分析における説明変数

オンライン、オフラインそれぞれのサポート得点ならびにPCとインターネットのスキル得点を説明変数として投入した。

3. 結果

(1) 予備的分析

信頼5項目の因子分析結果

信頼の潜在的な構造を検証するため、第1回調査時の信頼に関する5項目の項目得点について主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果を表5-1に示す。

なお、第2回調査時点での信頼5項目についても同様の分析を行ったが、その結果はここに示すものとほぼ同一のものであったため、ここでは触れない。

表5-1に示された第1因子には他者一般に対する信頼の強さを表す2つの項目が高い負荷を示している。よって第1因子を一般的信頼因子とする。また第2因子には特定の対人関係の相手に対する信頼を表す3つの項目が高い負荷を示している。よって第2因子を個別的信頼因子とする。以下の分析では、第1因子に高く負荷する2項目の平均得点を一般的信頼得点、第2因子に高く負荷する3項目の平均得点を個別的信頼得点として用いることとする。

表5-1 信頼尺度の因子分析結果(プロマックス解)

	I	II
一般的信頼		
たいていの人は人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する	0.739	0.012
ほとんどの人は信頼できる	0.680	0.004
知らない人よりも、知った人のほうがずっと信頼できる	-0.035	0.593
個別的信頼		
一般に、長く付き合っている人は必要なときに助けてくれることが多い	0.009	0.540
知らない相手との交渉の際、知り合いの紹介は非常に重要である	0.127	0.347
因子間相関		0.576

(2) オンライン・オフラインのソーシャル・サポートが well-being に及ぼす影響

オンラインならびにオフラインでのソーシャル・サポートが心理的、社会的 well-being に及ぼす影響に関するステップワイズ法による重回帰分析の結果を表2に示す。表に示されたものは、基準変数に対して5%以下の水準で有意な関連を示した説明変数の標準偏回帰係数とその有意水準である。表2からオンラインでの情緒的サポートの提供が心理的、社会的 well-being に重要な影響を及ぼしていることが分かる。それは心理的 well-being については自尊心と全般的な健康の2変数に対して有意な正の関連を示しており、社会的 well-being についても互惠性規範の内在化に対して有意な正の関連を示している。つまり、第1回調査時点においてオンラインで情緒的サポートをより多く提供したと答えた者ほど、第2回調査時点において自尊心と全般的な健康度が高く、互惠性規範の内在化の程度も高いということである。

一方、オフライン・サポートの影響についての結果は興味深い。まずオフラインでの情緒的サポートの受領が全体的な健康に対して負の有意な関連を示している。このことは、第1回調査時点においてオフラインで情緒的なサポートをより頻繁に受けている者ほど、第2回調査時点での全般的な健康度が低いことを意味する。またオフラインでの気軽なおしゃべりが一般的信頼に対して正の有意な関連を持つことも示されている。

さらに、一般的信頼が心理的、社会的 well-being に対して広範に関連することも分かる。第1回調査時点での一般的信頼得点は、第2回の一般的信頼だけでなく、全般的健康度と個別的信頼の2変数に対しても有意な関連を示している。

なお、以上の重回帰分析において、統制変数として投入したスキル得点と調査対象者群のダミー変数はいずれもどの基準変数に対しても有意な説明力を持たなかった。

表2 オンラインならびにオフラインサポートの授受と、PC・インターネット関連スキルが個人的、well-being及ぼす影響に関する重回帰分析(ステップワイズ法)の結果

	基準変数(第2回調査得点)				
	自尊心	全般的な健康	一般的信頼	個別的信頼	互惠性規範
	β	β	β	β	β
説明変数(第1回調査得点)					
統制変数					
自尊心得点	0.722 ***				
健康得点		0.603 ***			
一般的信頼		0.119 *	0.501 ***	0.141 *	
個別的信頼				0.494 ***	
互惠性規範					0.379 ***
オンラインサポート					
情緒的サポート提供	0.102 *	0.124 *			0.162 *
オフラインサポート					
情緒的サポート受領		-0.157 **			
気軽なおしゃべり			0.124 *		
R^2	0.541 ***	0.428 ***	0.259 ***	0.316 ***	0.171 ***

note † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(3) PC利用と社会活動への参加との関連

調査対象者4群それぞれにおける、第1回調査と第2回調査の社会参加の主観的頻度の平均値を表3に示す。これら平均値についての分散分析の結果、町内会等参加頻度得点については調査対象者群と調査時点との交互作用効果が有意であり($F(3/368) = 2.35$, $p < .10$)、新規利用者群において第1回調査から第2回調査にかけて町内会活動等への参加頻度得点が増加していた。市民運動等参加頻度については、調査時点の主効果($F(1/368) = 6.10$, $p < .05$)と調査対象者群の主効果($F(3/368) = 32.68$, $p < .001$)がいずれも有意であった。第1回調査から第2回調査にかけて全体的に参加頻度が増加しており、またシニアネット会員は未利用者群と比較して有意に参加頻度が高かった。趣味グループ等参加頻度得点についてはいずれの要因の主効果、交互作用ともに有意ではなかった。

表3 シニア世代のPC利用状況と社会活動への参加頻度との関連

	町内会等参加頻度				市民運動等参加頻度				趣味グループ等参加頻度			
	平均	time 1	time2	p<	平均	time 1	time2	p<	平均	time 1	time2	p<
全体		1.40	1.42	ns.		1.40	1.46	.05		1.92	1.97	ns.
未利用者	1.42	1.42	1.42	ns.	1.33	1.29	1.37	.05	1.91	1.88	1.94	ns.
新規利用者	1.40	1.35	1.44	.01	1.28	1.25	1.31	ns.	1.92	1.91	1.93	ns.
継続利用者	1.37	1.38	1.36	ns.	1.27	1.27	1.28	ns.	2.09	2.09	2.14	ns.
ネット会員	1.45	1.45	1.44	ns.	1.92	1.88	1.96	.10	1.86	1.86	1.92	ns.
p<	ns.	ns.	ns.		.001	.001	.001		ns.	ns.	ns.	

4. 考察

(1) 心理的 well-being について

以上の結果はシニアにおけるソーシャル・サポートの効果に関する従来の知見を追証するものであると同時に、インターネット上でのサポートの効果について新たな興味深い知見を提供するものである。

まず、自尊心と全体的健康度という心理的 well-being に対して共通して正の関連を示していたのは、オンラインでの情緒的サポートの提供であった。一方、オフライン上での情緒的サポートの受領は全体的健康度に負の関連を示していた。前者の結果はまず、シニアを対象としたソーシャル・サポート研究の従来の知見を確認する結果である。シニアはサポートの受領よりも、提供によって well-being が促進されるのである。しかも、この効果はオフラインでのサポートにおいてではなく、オンラインのサポートにおいて認められている。インターネットという新しいテクノロジーの世界の中での効力感の高まりが well-being を促進する効果を持ったことを示唆しているといえるだろう。

この結果について、回答者がもともと持っていた効力感の差によるものであるとの代替説明があるかもしれない。しかし次のような理由からこの代替説明は退けられうる。ここでの分析では被調査者のグループを統制変数として投入している。しかもそのコーディングに際しては PC スキルやインターネットスキルの高い群ほど高い値が付されている。にもかかわらず、重回帰分析の結果はそれが有意な説明力を持たないことを示している。このことは、心理的 well-being を高めたのは調査対象者がもともと安定的に持っていたオンラインでのサポート提供に対する効力感ではなく、第1回調査時点におけるオンラインでのサポート提供に伴う効力感の高まりであることを示唆するものである。

一方、オフラインでの情緒的サポートの受領が全体的健康度と負の関連を示したことについては2つの可能性が考えられる。ひとつは、サポートを受領することで自尊心が脅かされた結果として well-being が損なわれた可能性である。もうひとつは、本研究で扱ったサポートの指標が実行されたサポートであることに起因する可能性である。従来、ソーシャル・サポート研究において適応促進効果やストレス緩衝効果が認められてきたのは、サポートの利用可能性を指標として用いたものであった。逆に、実行されたサポートの程度

はしばしば適応指標と負の関連を示すことが報告されてきた。これは、適応水準が低いからより多くのサポートを受けようとするという因果関係によって生じた結果であると解釈される。

ここで見出されたオフラインでの情緒的サポート受領の **well-being** への負の関連が、これら2つの可能性のうちのいずれを示しているのかを現段階で確認することは困難である。しかしながら、ここで見出された結果が6ヶ月の間隔を置いたパネルデータの分析結果である点、そして第1回調査時点での全体的健康度が第2回調査時点でのそれに及ぼす影響を統制してもなお、オフラインでの情緒的サポート受領の負の効果が確認されている点を考慮すると、前者のメカニズムが働いた、すなわちサポート受領が自尊心への脅威となった可能性が強く示唆されるだろう。

(2) 社会的 **well-being** について

本研究の結果は、オンライン、オフラインでのサポート授受が社会的 **well-being** に影響を及ぼす過程について興味深い示唆を与えてくれる。まず、第1回調査時点のオンラインでの情緒的サポートの提供が第2回調査時点の互惠性規範の内在化の程度に正の有意な関連を示している。しかもこの関連は第1回調査時点での互惠性規範の内在化の程度を統制してもなお得られている。このことは、オンライン・サポートへの積極的な関与が互惠性規範の内在化を促進したことを強く示唆している。

一般的信頼に対して有意な関連を示したサポート変数は、オフラインでの気軽なおしゃべりの頻度のみであった。他者一般に対する信頼に対しては対面的な相互作用における友好的な交流が重要であることを示唆している。

一方、個別的信頼に対して有意な関連を示すサポート変数はオンラインでもオフラインでも見出されなかった。今回重回帰式に投入した諸変数の中では、第1回調査時点での個別的信頼得点以外には一般的信頼得点のみが、有意な関連を示していた。このことは、一般的な信頼がオフラインでの友好性と個別的な信頼との関係を仲介している可能性を示唆している。今後、オンライン、オフラインでのサポートと一般的ならびに個別的信頼、互惠性規範の内在化といった諸変数のより全体的な関連性についてより詳細な分析が必要であろう。

(3) 社会参加について

社会参加についての分析の結果の中で特に興味深いことは、新規利用者群において第1回調査時点から第2回調査時点にかけて町内会等への参加頻度が有意に増加していた点である。新規利用者群とは、第1回調査時点ではPCを利用していないと答えていたが、第2回調査時点ではPCを利用していると答えた調査対象者の群である。この群の調査対象者の町内会等への参加頻度が第1回調査から第2回調査にかけて増加したことは、PC利用によって社会活動の機会が増加する可能性のあることを示唆している。

もっとも、この可能性に関してその具体的なメカニズムについてはより慎重に考察すべきであろう。表3に示されたとおり、未利用者群でも市民活動等参加頻度において第1回調査から第2回調査にかけて有意な増加が認められている。この増加はPC利用によるものと解釈することはできず、IT講習に参加することが社会参加のきっかけとなって生じたものと解釈すべきかもしれない。とすれば、新規利用者における町内会等参加頻度の増加に

についても同様の影響過程が生じている可能性も否定できない。また新規利用者群において、一般的信頼と個別的信頼のいずれにおいても第1回調査から第2回調査にかけて得点が有意に増加したとする確かな結果は得られていない¹。そのため、本研究の結果から、IT講習への参加あるいはPC利用機会の増大、もしくはその双方が信頼の醸成を促した結果として社会参加の機会が増大したと結論づけることには慎重でなければならない。今後は、この点についてのより多様な側面からの分析が必要であろう。

<注>

¹ 両信頼性得点について調査対象者群×調査時点の分散分析を行ったところ、どちらの信頼性得点においてもどの変数の主効果、交互作用ともに有意ではなかった。ただし、新規利用者群だけを取り出した分析では、第1回調査から第2回調査にかけて一般的信頼が有意に増加する傾向($F(1/379) = 3.14, p < .10$)が示されている。

<引用文献>

- Allen, K. M., Blaskovich, J., Tomaka, J., & Kelsey, R. M. 1991 Presence of human friend and pet dog as moderators of automatic responses to stress in women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 582-589.
- Cohen, S & Wills, T. A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- Kim, H., Hisata, M., Kai, I., Lee, S. 2000 Social support exchange and quality of life among the Korean elderly. *Journal of Cross-Cultural Gerontology*, 15, 331-347.
- Kraut, R., Lundmark, V., Patterson, M., Kiesler, S. Mukophadhyay, T., & Scherlis, W. 1998 Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being? *American Psychologist*, 53, 1017-1031.
- Kraut, R. Kiesler, S., Boneva, B. Cummings, J. N., Helgeson, V., & Crawford, A. M. 2002 Internet paradox revisited. *Journal of Social Issues*, 58, 49-74.
- Larose, R., Eastin, M. S., & Gregg, J. 2001 Reforming the internet paradox: Social cognitive explanations of internet use and depression. *Journal of Online Behavior*, 1.
- Lin, N. 2000 *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 松井 豊・浦 光博(編著) 1998 人を支える心の科学. 誠信書房.
- Puttnum, R. D. 2000 *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon & Schuster.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*, Princeton, Nj: Princeton University Press.
- 菅沼 崇・浦 光博 1997 道具的行動と社会情緒的行動がストレス反応と課題遂行に及ぼす効果. 実験社会心理学研究, 37, 138-149.
- 浦 光博 1992 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学. サイエンス社.
- 浦 光博・宮田加久子・長谷川孝治 2000 ネット・サポートとリアル・サポートのインターネットフェイスの検討(2), 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 44-45.